



巻頭言

凜として

——日々の積み重ねが育てる自信——

関口はつ江

卒業式シーズンにある幼稚園の卒園式に出席する機会を得た。十人に満たない卒園児だったが、子どもたちが式場に入場するときから四十分ほど、多くの大人たちに囲まれながら、卒業証書を頂く、先生の話を聞く、歌を歌う、どの場面でも一人一人が堂々とよい姿勢で振る舞う姿に魅せられてしまった。幼さの中にも「凜として」新しいことに向かっている自信が伝わってきた。その子どもたちは式の後、保育室で無邪気に賑やかに積み木遊びをしていたが、喧嘩をして、先生に「お友達が嫌がることはしないのよ」と最後まで強くたしなめられていた。どのような時でも大切なことは一貫して身につけさせようとし



ている「凜とした」保育者の心を垣間見た思いだった。

卒園式の練習は一回だけと伺い、日頃の生活の中でどのような場面にも通用するよい振る舞い方の基本と、常に対象に集中する態度が作られてきたことが、この晴れの日でも極端に緊張したり、はしゃいだり、不安になることもなく、いつもの自分で判断して行動すればよいとの安定感でいられたように思えた。そして、これからも、どこでも。

そこで、その一ヶ月ほど前、小学校の授業参観をした時の驚きを思い出した。学校生活も一年が過ぎようという時期、国語の授業でのこと、子ども同士でふざける子、机の上が乱雑な子、姿勢の悪い子、どのような行動に対しても先生からの注意はない。授業では順番に教科書の音読をしたが、よい読み方についての手本や助言はない。それぞれの子どものなりのやり方だったが「みんなわかりやすくはつきりと読みましたか」「はい」という先生と子どもたちの掛け合いで終わった。教室の後に貼ってある子どもたちの絵日記の文字が違っていても訂正はなく、小さな続字で先生の感想が書き込まれていた。授業時間が終わらないうちに参観にきていた大学生とふざける子もいたりしながら何となく授業は終わった。

適切な行動や思考の仕方への手がかりが明確に与えられず、集中力が感じられない教室の状態に、学校で学び始めたばかりの一年生に必要な指導は何なのかを考えさせられてしまった。



近年、我が国では小学生から大学生に至るまでの学力低下が教育の大きな問題の一つとなっている。学ぶ主体としての子どもの内からの要求を直視して大人はきちんと応えているかどうかを真剣に問い直さなければならぬと思う。

『人間は教育されなければならない唯一の被造物である』（カント）という人間像は特殊近代社会の前提である、「教える―学ぶ」の関係は一方向ではない、子どもたちは単一の価値を押しつけられてはならないなど、教育の受け手としての子ども像から生活の主体者としての子ども像への転換、子どもの自発性の尊重への動向の中で、「導く―育つに任せる」「統制―自由」「基本―応用」の問題はどうしても子どもの自主の方向への原則論へと向う。しかし、教育・保育の場の子どもたちの姿を見ると、これはAかBかの対立としてではなく、もっと子どもの実際の姿に即して、何が子どもを育てるのかを見極めて対応すべきであることを痛感する。

「新しい学力観が言われてから、現場がやや行き過ぎの感がある。『知識を与えるのではなく、子どもにも考えさせる』『子どもが意欲を損なわないように、発言に否定的なことは言わない』……『詰め込み』『教え込み』の反動として知識を教えるということ自体、もはや古い（悪い）ことであるような風潮が広まってしまった。……この十年ほどの変化で言えば『きちんと教えない授業』が目につくようになった。子どもたちが明らかに誤ったことを言っても『発言意欲をそいでしまうから』ということでは正すことをしない。……多



くの子どもたちは授業だけでは一体何を学んだのかわからないまま時間だけが過ぎていく。新しいことがわかったという喜びも味わえなければ、得た知識を使ってさらに発展的な活動に至るといふこともない」(注)との授業に関する反省は、幼児教育の場についても当てはまることであろう。

例えば、保育についての話し合いで「子どもがトイレの後で手を洗わないとしても、もしこれから泥んこ遊びをしようと思っっているのなら、本人が考えてそうしているのだから注意しなくてもよいのでは」というような意見があった。そうであろうか。次に何をするにしても、やらなければならぬと知っていることを面倒がらずにきちんとやっていると、子どもは自分に自信と誇りをもつことができるのではないだろうか。そうするようには、支えることが子どもの高い精神性を育てることになるのではないだろうか。

「よく教育することはよく生活させることである」とは羽仁もと子のことばだが、「よい生活を」構成し教えるのは大人の役割であり、様々な揺らぎの中にある子どもを支えるには、保育者に毅然とした生活態度が求められる。幼児期に当たり前のことが正しく身につくまで教える(方法はいろいろあるが)ことを躊躇することは、先の学力低下と同じ問題につながるのではないかと思うのである。

(十文字学園女子大学)

(注)市川伸一『学力低下論争』ちくま新書 二〇〇二 二〇九―二一〇頁